北摂における庄内式土器の動態について

― 猪名川東岸域を中心に ―

陣内　高志

１．はじめに

昭和 40 年（1965）、大阪府豊中市の庄内遺跡出土土器を指標として庄内式土器が提唱された（田中琢 1965）。言うまでもなく、弥生土器から古式土師器への変遷を考える上で重要であるだけでなく、女王卑弥呼が活躍した時代と重なることから、我が国における考古学史上、最も関心の高い土器の一つと言える。その関心が高いが故に、当該土器の実態について畿内地方を中心として多くの研究が蓄積されており、その結果、庄内式土器の最初の製作地は豊中市が所在する摂津地方ではなく河内地方、特に八尾市一帯であったことが判明している（米田 1988）。これに伴い庄内式土器という土器様式名称についても本来の誕生地にちなんだ名称に改められるのかというと、実際のところはそうではなく、今なお庄内式土器という様式名称が維持され、今後も使用され続けていくことになるであろう[(1)]。

ところが、畿内各地域の庄内式土器の動態が判明する中、北摂地方、なかでも庄内遺跡を擁する豊中を含んだ猪名川東岸域の動態については、現在も詳細な分布状況が判然としない。そこで庄内式土器について、学史上の故地である豊中市庄内遺跡が所在する猪名川東岸域、特に豊中市の出土状況を集成することにより、摂津地方における庄内式土器動態把握のための一助になるのではという思いで若干の検討を試みた。

２．検討の対象について

今回は北摂地方のなかでもさらに地域を絞り込んだ猪名川東岸域、具体的には豊中市内の出土事例を取り扱う。庄内式土器の時期区分や編年研究は畿内各地域でおこなわれ、それぞれの地域において成果が公表されている。このうち北摂地方は摂津の一部、一般に淀川よりも北方の地域一帯を指す名称である。当該期の土器相としては、庄内式土器甕が中河内地方において製作される段階においても依然として畿内第Ⅴ様式の伝統を受け継ぐ土器群の製作が行われている地域として位置付けられる（酒井 1975、米田 1991、田中元 2005）。

今回の検討対象は、豊中市内遺跡のうち、庄内式土器甕[(2)]が実際に出土した遺跡と遺構を対象とした。したがって該期の遺跡であっても、畿内第Ⅴ様式系土器のみ出土の遺跡については取り上げていない。時期区分は特に庄内式土器の動態に注目することにして、寺澤薫氏及び田中元浩氏による各分類案（寺澤 1986、田中元 2005）を参考にしつつ、古相、中相、新相の３時期区分とした[(3)]。その結果、当該地域における庄内式土器出土遺跡は少なくとも 11 遺跡 38 遺構であり、その結果を表１・２および図１にまとめた[(4)]。

表１　庄内式土器出土遺跡と遺構一覧（猪名川東岸域）

番号	遺跡名	次数	立地	出土遺構	出土器種	時期			文献	備考
						古相	中相	新相		
29	新免遺跡	第11次	台地	土坑4（竪穴住居2内）	甕※1		?		豊中市教育委員会・阪急宝塚線連立立体交差遺跡調査団1987	砕片、混入品？
		第11次		SP664	甕		?		豊中市教育委員会・阪急宝塚線連立立体交差遺跡調査団1987	砕片
		第19次		SH-2（炉周辺）	甕	?			豊中市教育委員会1988	
		第22次		SH-8	甕	?	?		豊中市教育委員会1988	
		第28次		土器溜り中層	甕				豊中市教育委員会1990	
		第44次		土坑3	壷・高坏※2				豊中市教育委員会1997	
49	曽根遺跡	第13次	台地	溝1	甕				豊中市教育委員会2015b	
53	豊島北遺跡	第6次	沖積地	第5層出土遺物	甕				豊中市教育委員会2015a	
56	服部遺跡	第1次	沖積地	SK1	甕				服部遺跡調査団・豊中市教育委員会1986 豊中市史編さん委員会2005	
		第1次		SK4	甕				服部遺跡調査団・豊中市教育委員会1986 豊中市史編さん委員会2005	
		第5次		SK130	甕				六甲山麓遺跡調査会1996	
62	利倉遺跡	第1・2次	沖積地	D-5・E-5区	甕				利倉遺跡発掘調査団1976	
64	利倉西遺跡	第1次	沖積地	1区南落ち込み1	甕(生駒西麓)				豊中市史編さん委員会2005	
		第1次		2区南落ち込み1 第6層	甕				豊中市史編さん委員会2005	
67	穂積遺跡	第1次	沖積地	SK44	甕2(生駒西麓)				柳本照男1983 豊中市史編さん委員会2005	井戸の可能性有。廃絶時に祭祀？
		第1次		SK21	甕				豊中市史編さん委員会2005	
		第1次		円形周溝状遺構SD37	甕				豊中市史編さん委員会2005	直径約9m（内径）、溝幅1.5～2m
		第1次		SK22	甕				豊中市史編さん委員会2005	
		第1次		SK23	甕				豊中市史編さん委員会2005	
		第1次		SK35	高坏				豊中市史編さん委員会2005	
		第1次		SK39	壷				豊中市史編さん委員会2005	
		第27次		井戸1	甕				豊中市教育委員会2001	外面左上りタタキ甕（大和型?）
		第43次		溝3	甕				豊中市教育委員会 2018b	
		第44次		SP5011	甕				豊中市教育委員会2019	
69	小曽根遺跡	第8次	沖積地	SE1	甕				豊中市史編さん委員会2005	外面左上りタタキ甕（大和型？）
		第8次		SE2	甕				豊中市史編さん委員会2005	
		第8次		SH-1	甕				豊中市史編さん委員会2005	
		第8次		河川出土遺物	甕		?		豊中市史編さん委員会2005	
		第19次		SE7	甕		?		豊中市史編さん委員会2005	
		第19次		SE10	甕・壷・高坏				豊中市史編さん委員会2005	
		第25次		土坑1	甕				豊中市教育委員会1999a	
71	北条遺跡	第1次	沖積地	周溝墓1	壷				豊中市史編さん委員会2005	
		第1次		第1ブロック	壷				豊中市史編さん委員会2005	
78	島田遺跡	第4次	沖積地	北大溝SD1	甕・高坏				豊中市史編さん委員会2005	
79	庄内遺跡		沖積地	工事中発見土器群	甕2(生駒西麓)				藤澤一夫1961 田中琢1965 豊中市史編さん委員会2005	二重口縁壷(在地産※穿孔有) 「庄内式土器」提唱(1965年)
		第5次		C区86溝	甕				(公財)大阪府文化財センター2021	
		第5次		C区101溝	甕			?	(公財)大阪府文化財センター2021	混入品？
		第5次		C区115溝	甕				(公財)大阪府文化財センター2021	

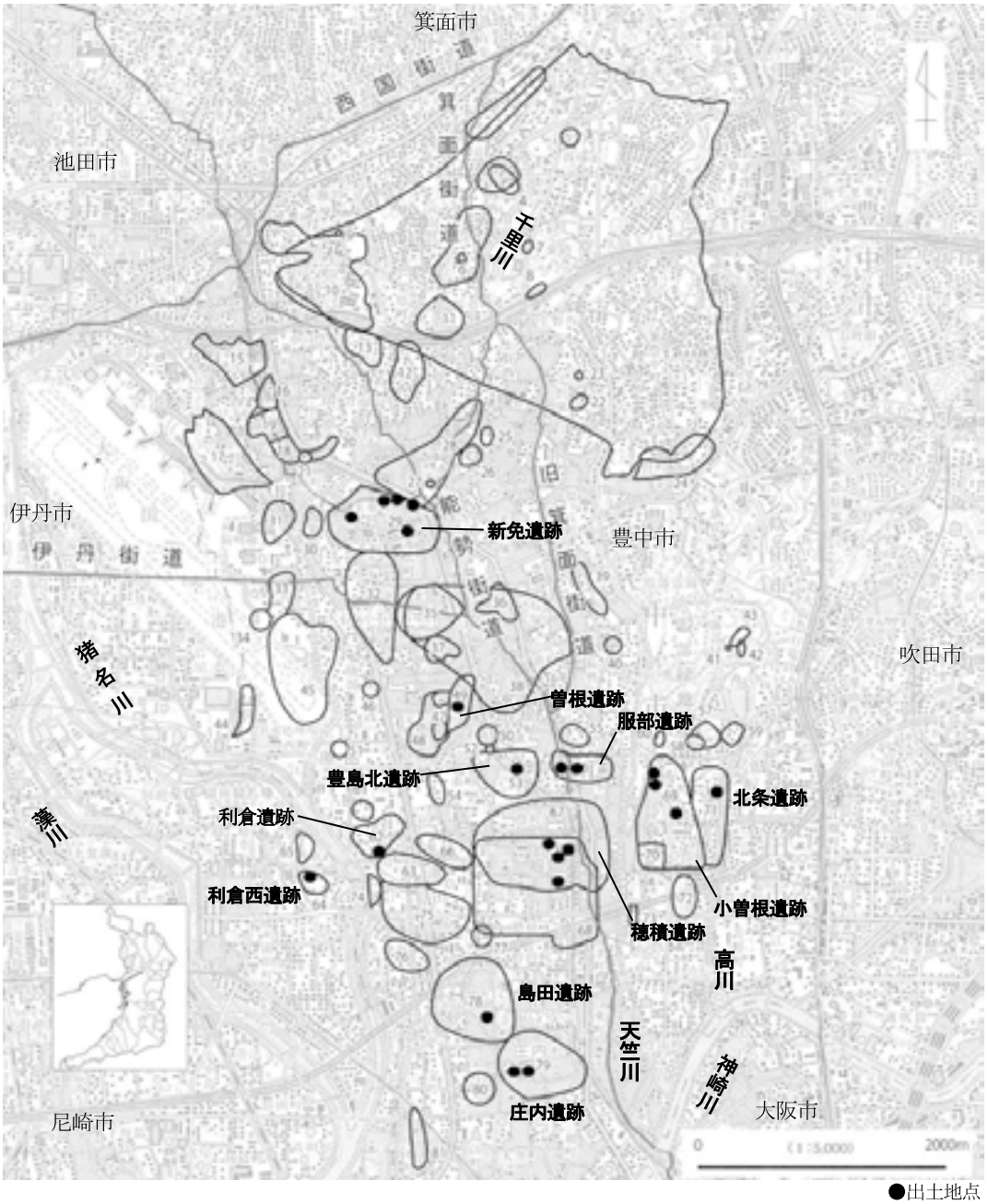
【SP：ピット、SH：竪穴住居、SK：土坑、SE：井戸、SD：溝】【「？」は砕片で時期比定困難のため推定を含む】

※1「甕」のみ表記は在地産庄内式甕
※2「壷」、「高坏」は精製器種B群

３．検討結果

ここでは、遺跡と遺構の分布状況、出土遺構別の内訳、そして時期別の出土状況の３つの検討を行う。

まずは遺構と遺物の分布状況について、表１より市内の出土地をみてみよう。出土 11 遺跡のうち台地上は新免移籍と曽根遺跡の２遺跡であり、その他９遺跡は沖積地の遺跡であった[(5)]。猪名川と



●出土地点

1太閤塚古墳群
2野畑春日町古墳群
3野畑遺跡
4野畑春日町遺跡
5少路遺跡
6武蔵国開拓藤安部氏
桜井谷陣屋跡
7桜井谷石器散布地
8別當下池南遺跡
9時雨山古墳
10時雨山遺跡
11内田遺跡
12柴原遺跡
13北刀根山遺跡
14桜井谷窯跡群
15箕池北（宮の前）遺跡
16箕池東遺跡
17箕池西遺跡
18箕池遺跡
19岡田藩陣屋跡
20南刀根山遺跡
21御神山古墳
22上野遺跡
23青池古墳
24熊野田遺跡
25金寺山廃寺
26新免宮山古墳群
27金寺山廃寺塔柱礎石
28北町遺跡
29新免遺跡
30笠輪東遺跡
31笠輪遺跡
32山ノ上遺跡
33勝部北遺跡
34老井遺跡
35岡町北遺跡
36岡町遺跡
37岡町南遺跡
38桜塚古墳群
39下原窯跡群
40長興寺遺跡
41桜塚古墳
42城輪熊布地
43大阪城跡発掘事竹支配塀跡遺跡
44原田西遺跡
45勝部遺跡
46勝部東遺跡
47原田城跡（北城）
原田城跡（南城）
48原田遺跡
49曽根遺跡
50曽根東遺跡
51原田小町遺跡
52曽根城輪窯跡
53豊島北遺跡
54曽根南遺跡
55城山遺跡
56服部遺跡
57若竹町遺跡
58石蓮寺廃寺
59寺内遺跡
60石蓮寺遺跡
61利倉北遺跡
62利倉遺跡
63利倉南遺跡
64利倉西遺跡
65稚児ノ前遺跡
66服部西遺跡
67[illegible]遺跡
68[illegible]村屋敷
69小曽根遺跡
70春日大社南郷田代今西氏屋敷
71北条遺跡
72小曽根南遺跡
73上総国飯野藩保科氏浜陣屋跡
74上津島川東遺跡
75上津島遺跡
76上津島南遺跡
77熊耐ポンプ場遺跡
78島田遺跡
79庄内遺跡
80島江遺跡
81江木遺跡

太字は出土遺跡

※国土地理院 大阪北西部・東北部(1:50,000)に加筆

図１　庄内式土器分布図（猪名川東岸域）

表２　遺構別出土件数　（※表１と対応）

出土遺構	遺構略称	検出数	備　考
土坑	SK	12	
ピット	SP	2	
竪穴住居	SH	3	
溝	SD	8	穂積遺跡の周溝含む
井戸	SE	6	
包含層		2	利倉遺跡含む
土器だまり		1	
落ち込み（旧河道）		2	
工事中発見		1	
その他		1	北条遺跡第1ブロック
計		38	

天竺川に挟まれた沖積地、つまり市南部に出土が集中することがうかがえる。なかでも穂積遺跡と小曽根遺跡の２遺跡で 17 遺構、さらに穂積遺跡・小曽根遺跡とごく近隣に所在する３遺跡（豊島北遺跡・服部遺跡・北条遺跡）も含めると 23 遺構に達し、市内の検出遺構数のうち半数以上が穂積遺跡と小曽根遺跡一帯に集中する。穂積遺跡は当該期の集落内からフイゴ砕片や銅鏃の未成品が出土しており、集落内で金属器（青銅器）生産が行われていたと考えられている。小曽根遺跡では第８次、第 19 次調査で多数の竪穴住居と井戸跡が検出されており、しかも吉備地方など他地域産の土器も出土することから、穂積遺跡とともに当該地域における拠点的集落であったとみられる。このことは、猪名川東岸域における庄内式土器の動態を検討する場合、少なくとも新相段階は穂積遺跡と小曽根遺跡の２つの拠点集落とその一帯が重要な役割を担っていた可能性の高さを指摘できる。

ところで、標識遺跡である庄内遺跡はというと、過去に５件本発掘調査が実施されているが、庄内式土器の出土事例に乏しい。その中で第５次調査（（公財）大阪府文化財センター 2021）では溝から甕が数点出土しているが、いずれも砕片または混入品であり、依然、昭和 10 年頃の校舎建設の際に発見された土器群を除くと、当該期の遺構・遺物の検出事例に乏しく、遺跡の内容が不明瞭である。今後の庄内遺跡の発掘調査成果に期待したい。

続いて、出土遺構別の内訳については表２に示す通りであるが、土坑（SK）及び溝（SD）からの出土例で 20 件と全体の半数以上を占めていることがわかる。とはいえ、この他井戸やピット、竪穴住居、包含層や落ち込み（旧河道）、土器だまりからの出土も確認できることから、件数に多少の差異はあるものの、特定の遺構に集中する傾向はないことがわかる。出土状況についても利倉西遺跡は落ち込みに廃棄された状態、穂積遺跡第１次では円形周溝状遺構内から多数の土器に入り混じった状態での出土、服部遺跡第１次では直径 2m を超える２段に掘り込まれた土坑埋土中からの出土、小曽根遺跡第８次は井戸埋土中からの出土、庄内遺跡第５次は溝中に他時期の遺物とともに混入された状態で出土などである。同じ庄内遺跡で工事中に発見された土器群のなかの一つ、在地産ではあるが二重口縁壷（図３）の出土は注目される。当該二重口縁壷は穿孔を有することから、墳墓祭祀に使用された可能性がある（豊中市史編さん委員会 2005）が、詳細な出土状況は不明である。

次は時期的な出土状況をみる（表１）。先述の通り 38 遺構のうちおよそ 26 遺構、つまり３分の２が新相段階であることから、猪名川東岸域については庄内式土器後半期に急増することがわかる。

その一方で、中相以前の当該地域では、表１をみる限り、当該地域に庄内式土器の流入および使用

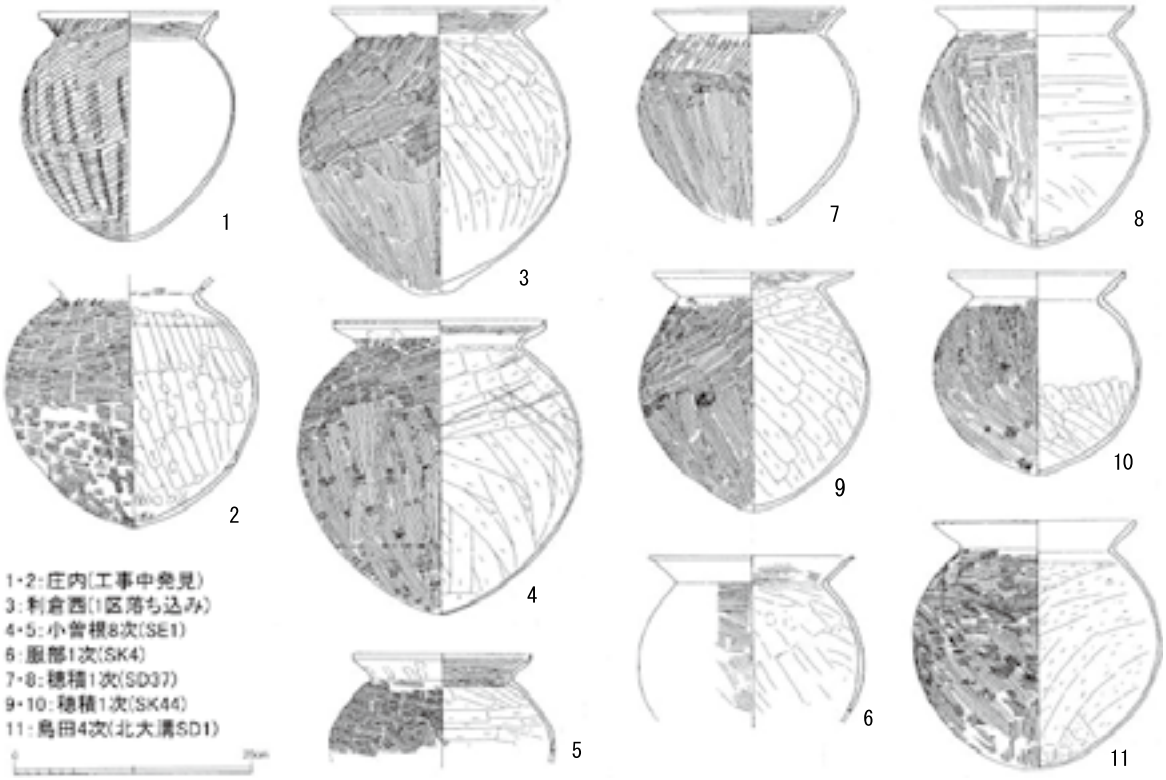


図２　主な庄内式土器甕（猪名川東岸域）

されることがほとんどなかったといえる。ただし、現在未整理の遺物整理作業の進展および今後の発掘調査成果によって変動する可能性がないわけではない。古相段階の庄内式土器は、河内地方、大和地方を除くと搬入品という形でしか存在しない段階といわれる（田中元 2005 ほか）が、その中で庄内式土器提唱のきっかけとなった庄内遺跡において、工事中発見の土器群中からとはいえ、古相の庄内式土器甕（図２－１）が出土している点は注目される。猪名川東岸域における庄内式土器の受容過程に庄内遺跡が一定の役割を担っていたことが推察される。

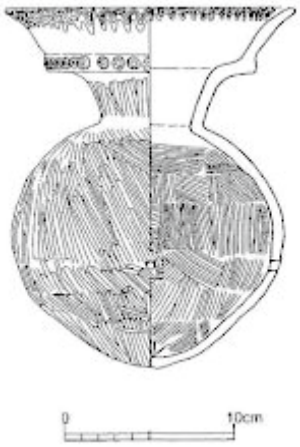


図３　二重口縁壺
（庄内遺跡出土）

４．まとめ

本稿では、庄内式土器の動態について、北摂地方の一部猪名川東岸域の出土動向に焦点をしぼって概観した。その結果、当該地域の特徴として下記の５点を指摘しうるに至った。

①市域南部の沖積地に分布が集中し、特に穂積遺跡及び小曽根遺跡の２つの拠点集落が中心的な役割を担っていた可能性が高い。

②中相段階以前の状況は依然不明瞭である。

③庄内遺跡では、出土数が非常に限られる古相段階の庄内式土器が出土しており、当該地域における庄内式土器受容過程に関与した可能性が高い。

④庄内式土器とその出土遺構間に特別な相関関係はなく、各種遺構から万遍なく出土している。

⑤本文中で触れなかったが、当該期間中、第Ⅴ様式系土器のみの遺跡も存在する。勝部遺跡はその一例であるが、庄内式土器の有無によって当時の集落に何らかの差異がみとめられるのであろうか。

以上、問題提起に留まった感が強いが、今後の当該地域における庄内式土器の受容やその後の展開を検討する際の基礎的データを提示できたのではないかと考えるとともに、もちろん今回のデータは今後の整理作業と調査成果により追加修正されるべきものと考えている。また、庄内式土器の「聖地」（田中元 2023）とも称される庄内遺跡の動態については、工事中の発見以降、それに続く大きな成果が得られていない。しかし、今後の発掘調査によって徐々にではあるが明らかになるだろう。

謝辞

本稿をまとめるにあたって、豊中市教育委員会社会教育課、豊中市立郷土資料館の皆様より資料収集その他で教示を得た。この場を借りて篤く御礼申し上げたい。

註

（1） 庄内式土器の提唱者田中琢氏は、「しかし、庄内式という言葉はここ 10 年以内に消え去らなければならない。新しい言葉が、様式名が登場しなければ土器の研究は進まない」と、平成元年（1989）、豊中市で開催された埋蔵文化財研究会の席上で発言されている（田中琢 1989）。

（2） 本稿でいう庄内式土器甕は、田中元浩氏の分類の初期庄内甕、生駒西麓型庄内甕、大和型庄内甕、在地産庄内甕、変容甕が該当する（田中元 2005）

（3） 本稿の時期区分について、先学の編年観（寺澤 1986　田中元 2005）との対応関係は、以下の通りである。主に甕の型式変化を基軸とした分類である。この他、『新修豊中市史』（豊中市史編さん委員会 2005）の記載内容も参考とした。

・古相　中河内地域で庄内型甕の出現（寺澤：庄内 0 ～ 1 式、田中元浩：Ⅰ期）

・中相　生駒西麓型と大和型の各庄内甕が誕生（寺澤：庄内 2 ～ 3 式、田中元浩：Ⅱ期）

・新相　布留甕の出現（寺澤：布留 0 式、田中元浩：Ⅲ期）

（4） 令和 6 年（2024）8 月現在における出土状況である。今回掲載遺跡の他に、勝部遺跡、上津島遺跡、上津島南遺跡で「庄内式土器」が出土している可能性が高いが、未整理で詳細が把握できていないため、対象遺跡から除外した。また、掲載遺跡であっても、新免遺跡、豊島北遺跡、穂積遺跡等は現在も整理中であるため、今後件数が追加される可能性もある。

（5） 豊島北遺跡と服部遺跡の立地は沖積地に分類されるが、いずれも通称「豊中台地」直下のところに立地する。台地直下の沖積地という点で他の沖積地立地遺跡と若干異なる。

引用・参考文献

(財)大阪府文化財センター 2003『勝部遺跡(大阪国際空港周辺緑地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)』
(公財) 大阪府文化財センター 2021『庄内遺跡（仮称庄内さくら学園整備事業に伴う庄内遺跡第 5 次発掘調査報告書)』
小林行雄・森本六爾 1938『弥生式土器聚成図録』東京考古学会
小林行雄・杉原荘介 1968『土師式土器集成』本編 2 東京堂出版
酒井龍一 1975「和泉における弥生式～土師式土器の移行過程ついて - 認識論的作業仮設として -」『上町遺跡発掘調査概要 - 和泉市上町所在 -』和泉市教育委員会
田中　琢 1965「布留式以前」『考古学研究』第 12 巻 2 号 考古学研究会
田中　琢 1989「1960 年代の土器研究と古墳研究の状況」『古墳時代前半期の土器研究とその社会』第 25 回埋蔵文化財研集会講演記録 埋蔵文化財研究会
田中元浩 2005「畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第 20 号 日本考古学協会
田中元浩 2023「庄内式土器研究の現在」『庄内式土器－豊中で発見された卑弥呼の時代の土器』開館一周年記念講演会資料 豊中市教育委員会
寺澤　薫 1986「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第 49 冊 奈良県教育委員会
利倉遺跡発掘調査団 1976『利倉遺跡』
豊中市教育委員会 1988『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1987 年度』
豊中市教育委員会 1990『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1989 年度』
豊中市教育委員会 1997『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 - 阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査 -1995 年度』
豊中市教育委員会 1998『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 - 阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査 -1997 年度』
豊中市教育委員会 1999a『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 - 阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査 -1998 年度』
豊中市教育委員会 1999b『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1998 年度』
豊中市教育委員会 2001『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 2000 年度』
豊中市教育委員会 2015a『豊島北遺跡第 6 次発掘調査報告書』
豊中市教育委員会 2015b『曽根遺跡第 13 次発掘調査報告書』
豊中市教育委員会 2018a『新免遺跡第 68・69・70 次発掘調査報告書』
豊中市教育委員会 2018b『穂積遺跡第 43 次発掘調査報告書』
豊中市教育委員会 2019『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 2018 年度』
豊中市教育委員会 2021『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 2020 年度』
豊中市教育委員会 2024『服部遺跡 第 4 次調査発掘調査報告書』
豊中市史編さん委員会 2005『新修豊中市史 第四巻 考古』豊中市
服部遺跡発掘調査団・豊中市教育委員会 1986『服部遺跡発掘調査報告書』
豊中市教育委員会・阪急宝塚線豊中市内連続立体交差遺跡調査団 1987『新免遺跡第 11 次発掘調査報告書』
藤澤一夫 1961「第二節弥生文化とその諸遺跡 庄内遺跡」『豊中市史第一巻』豊中市史編纂委員会
森岡秀人 2023「卑弥呼と庄内式土器が使われた時代」『庄内式土器－豊中で発見された卑弥呼の時代の土器』

開館一周年記念講演会資料 豊中市教育委員会
森岡秀人・竹村忠洋 2006「摂津地域」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
森岡秀人・西村　歩 2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題」『古式土師器の年代学』（財）大阪府文化財センター
柳本照男 1983「布留式土器に関する一試考－西摂平野東部の資料中心として」『ヒストリア』第 101 号 大阪歴史学会
米田敏幸 1985「中河内の庄内式と搬入土器について」『考古学論集』第 1 集 考古学を学ぶ会
米田敏幸 1988「中河内における伝統的第Ⅴ様式とその意義」『考古学論集』第 2 集 考古学を学ぶ会
米田敏幸 1991「土師器の編年 1 近畿」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』雄山閣
六甲山麓遺跡調査会 1996『豊中市服部遺跡 第 5 次調査』